

本多 恵訳

## 「Prasannapada」 XVIII～XXVII

### の和訳

小川 一 乗

龍樹の『中論偈』は、大乘佛教を思想的に確立した哲学的著作として、大乘佛教思想の研究にとって、今昔の別なく最も基本的な重要な文献とされていることは周知の通りである。かつての大乘佛教の論師たちによる『中論偈』に対する研究は、八師によってなされていることが明示され、さらには七十家ともいわれている如くに、誠に盛んであった。かれらによって著作された註釈書類が、梵文原典として、或いはチベット訳、漢訳に代表される諸訳として、現存していることによってそのことが知られる。

それらの中、Candrakīrti (600-650) の中論釈 Prasannapada は現存する唯一の梵文の註釈書として、現在の研究者によって特に重要視されている。現在のインド佛教研究者にとって、Prasannapada は、大乘佛教思想を、原典的に哲学的に理解する上で必読の書とされている事情から、多くの研究者たちによる現代語訳の試みもなされてきた。いまだ Prasannapada

全体が一ヶ国語に現代語訳されるに到っていなかったが、日英独仏の四ヶ国語訳を総合すると、そのすべてが現代語訳されていることになっている。

ところで、その中、和訳の試みは、これまでになくなされてきたが、それらの中にあって、代表的には、周知の如く、山口益先生(第一～十一章)と荻原雲来博士(第十二～十七章)によってなされたものが挙げられる。従って、これに続いて第十八章以下の和訳がまとまったものとして試みられることが待望されていたのである。

ところで、Prasannapada のような佛教論書の現代語訳ほど困難な作業はない。その完璧な現代語訳など現在の学問のレベルでは不可能といえる。いや、完璧性は永遠に求められるべきものであり、常に将来に属することなのかも知れない。梵文原典である Prasannapada の訳出にあたっては、何といっても、文法学的見解が重視されるが、もとよりそのことはきわめて重要な基本的事柄ではあるが、文法的に正確であればそれで完璧な現代語訳が可能となるというものでもない。そこには、それが書かれた時代の思想背景などに対する知識も要求されようが、何よりもまず、佛教論書は、文法家の書いた文法書ではなく、学僧が自らの信念を哲学的に吐露した宗教書であるということにおいて、単なる客観主義を越えた訳者自身の共鳴、共振がそこに要求されているといわなければならないからである。

いま、完璧な訳は不可能であるといったが、その場合、より正確には、『完璧な訳』についての定義が必要であらうが、そ

それはそれとして、われわれは、われわれを裨益する「勝れた訳」を手にすることは可能である。「勝れた訳」に出遇うとき、そこから、訳者の苦心の軌跡がにじみ出ているのを知ることができるし、佛教に対する訳者の信念を知ることができる。たとえば、その訳において、文法上の異論があるにしても、苦心の結果ゆえのぎこちなさがあるにしても、その中に、訳者の佛教理解の熱い息吹きを感じるとき、われわれは、それを「勝れた訳」と見なし得るのである。

さて、本訳は、同朋大学から出版されている「同朋大学論叢」に四回にわたって発表された *Prasannapada* の第十八章以下の和訳である。

第三十七号↓第二十四・二十五章

第三十八号↓第十八・十九・二十章

第三十九号↓第二十一・二十二・二十三章

第四十号↓第二十六・二十七章

これによって、山口先生と萩原博士による和訳に続いて、*Prasannapada* 二十七章のすべてが和訳されたことになり、斯界待望の研究成果がもたらされたのである。

私事ながら、かつて、山口先生が、第十八章以下の和訳のノートと清書された原稿の一部を手につつ、その清書が野沢静証先生の手になるものであること、その清書が野沢先生の手によってさらに継続されるよう望んでいることを、話題とされていたそのときのことが、いま眼前に彷彿するのである。時は流

れ、山口先生はすでに逝き、訳者本多恵氏による苦心の和訳がここにある。歴史の移り変りと学問の展開を感じずにはおれない、というべきであろう。

ついですが、訳者本多氏は山口先生によって出版された索引 (*Index to the Prasannapada Madhyamaka-vṛtti*, 2 vols, 1974) について言及されておられるが、その出版にあたっての山口先生のご苦心の程がいま改めて思い出されるのである。山口先生のご苦心がなければ、到底あの索引は出版され得なかったであろう。その辺の事情は平野隆先生もよくご存知のはずであるが、山口先生の下で、出版助成についての書類の作成やその他出版にいたるまでのお手伝いをさせていただいた筆者には、学界を少しでも裨益せんがためには、という山口先生の信念の熱い感触を忘れ得ないのである。現に、山口先生が生前、その出版を念願されて、あるテキストの龐大な索引がすでに清書されてありながら、いまだにそれが出版され得ないことを思うとき、その感をなおさら深くするのである。山口先生が存命であれば、その索引もすでに出版され、学界を大いに裨益していたであろうことを確信するのである。

いま、本訳を紹介するにあたり、そのすべてを精読する暇がないので、特に、第一冊(第三十七号)に掲載された最初の和訳(第二十四章)について、逐次的に、与えられた紙数の限りで、訳者の苦心の跡をたどりつつ、その研究成果を検討していくことにする。

(第二)、本訳を一瞥するとき、訳者の思い切った訳出の苦心の程が充分にうかがえる。それを一言でいえば、梵文原典の訳ということであろうか、伝統的な佛教用語の漢訳例に対する配慮をあえて無視して訳述を試みたように見受けられる、ということである。われわれは、梵文原典やチベット訳の解説を試みる際、その漢訳用例の恩恵にあづかるころ大であるが、また同時に、その言葉の意味を充分に解説しえないままに安易に漢訳用例に押し流されてしまう危険性を常に伴っているのである。訳者は、漢訳用例に追隨するデメリットを排しつつ、現代語として通用する訳語の使用に苦心をはらっている。それらを気付くままにピックアップしてみると、

「五取蘊 (pañca-upādānaskandha)」→「五構成要素」

「諦 (satya)」→「真理」

三苦の「苦苦、壞苦、行苦」→「痛苦、变化苦、形成苦」

「顛倒 (viparyāsa)」→「誤解」

「道 (pratipad)」→「実践」

三宝の中の「法、僧」→「理法、教団」

「緣起 (pratīyasamutpanna)」→「条件づきで生起した」

四諦の中の「集諦」→「出現の真理」

「滅諦」→「抑止の真理」

「法智忍 (dharma-jñānakṣānti)」→「理法の知恵の承認」

「類智 (anvaya-jñāna)」→「引き続いて得られる知恵」

「剎那 (kṣāna)」→「瞬間」

「睡眠 (anuśaya)」→「煩惱の可能体」

「無間道 (ānantaryamārga)」→「直前の道」

「所緣 (ālambana)」→「外的依り所」

「prakāra,ākāra (品、相、行相など)」→「姿」

などである。これらの現代語訳の上に訳者の佛教理解と苦心の程がうかがえる。これらの中には、その用語に対する理解について少しく異議を述べたいものもないではないが、このような訳出姿勢はそれはそれなりによいのではないかと思う。ただ残念なのは、このような佛教用語の現代語訳の試みが、本訳において必ずしも一貫していないように見受けられることである。例えば、「非想非非想処」「三界」「欲界」「色界」「無色界」「四禪定」「四無色」などが目につくが、これらの中には本訳の姿勢からして現代語訳された方がよいものもあるのではないだろうか。その他、*adhat* が「応供」(一一〇頁)と漢訳例そのままにされている場合と、「尊敬に値する」(一一五頁)と現代語訳されている場合とがある。そこには訳者の何らかの意図があるのかも知れないが、本訳の姿勢からして「尊敬に値する(者)」と統一した方がよいのではなからうか。また、四向四果の「向 (pratipannaka)」が「あづかる者」(一一三頁)と「ふみ入った者」(一一四頁)という二通りに現代語訳されているが、いずれかに統一した方がよいのではなからうか。

ともあれ、佛教論書の現代語訳にあたっては、種々の問題があり、苦勞が多くて成果は少ないというのが普通である。そのような訳出作業の中で明らかとなった点を整理して、訳者は、「プラサンナパダーの要語説明」(印佛研、二八の二)を研究

発表しているが、Prasannapada を読む上でよい参考となることであろう。

(第二)、次に、本訳を検討していく中で筆者の問題となつた二、三の訳文、その他について所見を述べてみたい。

(1) 「あるがままの知見(のみ)」が事物の本性を確立するからである」(一〇八頁)の訳文において、yathadarśanam が主語とされているが、文脈からいって、主語は、J. May 博士のフランス語訳において「かれらは(ils)」と指示されている如くに、「聖ならざる人々」でなければならないであろう。従って、yathadarśanam は「個々それぞれに」という程の意味であり、J. May 博士によつても conformément à leur expérience と訳されている。そういうことであれば、ここは、「(聖ならざる人々は) 個々それぞれに、事物の自性を設定するからである」という意味に訳されよう。

(2) 「諸感官は……知覚するが」(一〇八頁)において、indriya (根) が知覚するとされているが、すでに周知の如く、世親の俱舍論において、indriya (根) が知覚するのか、vijñāna (識) が知覚するのかの論争がなされ、識の知覚を主張する世親の立場に立てば、ここは、「くるってしまつた諸感官を有する者」とか、「諸感官がくるってしまつている者」が知覚するということになるのであろう。

(3) 「流れにふみ入るといふ果報を直観するから、あづかる者 (pratipannaka) と言われる」(一一三頁)という訳では、預

流向の説明となつていないことになるのではなからうか。「直観するから」の梵文 sakṣātkriyayai は、「直観せんがために」と読むべきであり、従つて、筆者の訳でいえば「預流果を現証せんがために、向つている者」ということであり、訳者によれば、「流れにふみ入るといふ果報を直観せんがために、ふみ入つた者」という訳になるのではなからうか。

(4) 訳者は訳述にあたつて、チベット訳を参見していることが、その註記のほとんどがチベット訳に関するものであることから知られる。このことは、文献学的にもきわめて当然なことであるが、特に、Prasannapada のチベット訳は、信頼のおける好完な訳として知られているのであり、訳者もチベット訳の恩恵を大いに受けていることと思う。それらの中であつて、チベット訳に対する訳者の不注意による誤解があるので、それを示しておく。例えば、註記(12)は訳者の不注意による全くの誤解である。梵文において「……帝釈によつて尋ねられた」(一一五頁)とあるのをチベット訳では「……帝釈によつても不可能である」となつていると訳者は註記しているのであるが、これは、北京版において / dban bsgyur gyis ni nus pa dan / とチベット訳されている ~ ni nus pa の ni を mi と誤読して否定詞と見なし「不可能である」と解説したものと思われる。しかし、この場合の nus pa (可能である) というチベット訳は、梵文 nuṣṭha (尋ねられた) の訳語となりえていないのであり、そのことは、デルゲ版において明らかな如く、この nus pa は shus pa (pr. of shu ba・尋ねられた) の誤写であることが知

られるのである。

蛇足ながら、この引用偏に対する筆者の解説を試みてみるならば、拙劣な試みではあるが、次のように解説してみたい。

「かれ（世尊）は、自在者にして天王なる帝釈によって尋ねられた。祭式の発願者、福德を願望する人々、信仰ある生活者の、財物を正しく使用した福德は、常に、そこにおいて大いなる果報が与えられる福田であると、汝に私は宣言しよう（「かれらによって」）布施されるべきその僧伽は、明知と実行を具足して四向四果に住する者である。」

(5) 本訳を検討していくとき、見落としと見られる訳の脱落が思いのほか多く見出される。筆者が目を通した短い部分（一〇七～一一五頁）においても六ヶ処余りが目についたが、その中で、最も大きな脱落は、訳者の訳し方によれば、「無常と苦と空と無我の姿として生じ、欲界の苦の真理を外的依り所とし」（一一一頁の二三行目の初めの部分に挿入されるもの）の一文であろうか。これなどは、見道と四諦に関する教義上の理解が確かめられていれば、避けられた脱落といえよう。

以上、訳者の大変な努力の研究成果に対して、失礼をまかえりみず、場あたりの所見を述べた。多少、問題点を挙げつらう結果になったが、これによって、本訳の意義が損われるようなことは、もとよりありえないのである。かえって、困難な訳述をなしたげた訳者の努力に対する敬意の思いを深くするのである。

強いていえば、本訳には、訳述にあたつての文献学的な基礎作業が充分になされていないように見受けられること、訳の脱落といった訳述に当つての緻密さに少しく欠けている点のあること、佛教の教義的背景に対する理解が少しく等閑にされているかに見受けられること、等々に対する課題が残されているといえようが、このような訳述研究は一步一步前進していくものであり、本訳の研究成果を手掛りとしたさらにすぐれた研究成果を期待しつつ、本訳の意義を讀みたい。

（同朋大学論叢、第三十七・三十八・三十九・四十号、昭和52・55年、同朋大学同朋学会）